

# こ まち べに 小町紅の背景 — “美”のシンボル、 小野小町像の変遷

## 伝説化された美女

過去に本誌では、江戸時代以来の化粧紅の名称「小町紅」に関して、その商標を巡って生じた紛議の経緯を紹介したことがある(vol.44)。小町紅の名は、美人の誉れ高い小野小町に因んだものであり、18世紀後半には紅屋同業者間における使用の広がりが見られる。今回は、「小町」という冠が商品名に採用された背景について、小野小町像の変遷に焦点をあてながらみていこう。

平安時代前期、仁明朝(810-50年)に活躍したとされる歌人小野小町は、日本人の多くが絶世の美女という伝説を承知する存在である。だが実のところ、小野小町に関しては生没年や系譜など不明な点が多く、推定される在世中にその容貌を評した、あるいは示唆した史料さえ見当たらない。ただ、勅撰集『古今和歌集』(905-12年頃成立)に収められた小野小町の18首の歌(内13首が恋部所収)、なかでも「花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに」の歌意への解釈と『同』仮名序にみる小野小町評が、小町=美女説の風評に大いに貢献したことはかねてより言われてきた。私家集『小町集』が成立した10世紀末~11世紀初頭頃には、小町は通説的に美女となっており、加えて所収された詠歌がのちの小町説話の形成に深く関わっていることが先学によって明らかにされている。



「摸擬六佳撰 小野小町」こま絵部分より  
抜粋・一陽齋豊国画

小町説話とは、端的に言うと小野小町に関する種々の伝説・伝承である。謎に包まれた生涯を送った歌人は、それゆえに世人の興味を引き、様々な説話(小町像)が作られた。今日、日本全国に小野小町ゆかりの史跡(小町塚・小町墓など)が広がっているのは、小町説話が増幅し、長い時間をかけて流布していった所産である。

広範にわたる小町説話だが、その根幹をなすのは下掲の①美女驕慢伝説、②衰老落魄伝説、③歌人伝説である。ことに鎌倉時代以降は、①②を組み合わせたもの、美女の驕慢から落魄の生涯を述べるものが主流をなすようになる。この展開に大きな影響を与えたのが『玉造小町壮哀書』である。

- ①他に類を見ない美貌を誇った小町が、己に懸想する男を拒絶または翻弄し続けたという**美女驕慢伝説**
- ②老いて容色衰頹した小町が、零落し、放浪の末に悲惨な最期を遂げるという**衰老落魄伝説**
- ③早魅の折、小町が雨乞いの歌を詠み、雨を降らせたという説話に代表するような小町の歌才を軸にした**歌人伝説**

## 二人の小町の混同

11世紀前半頃に成立した漢詩文作品の『玉造小町壮哀書』は、天台浄土教の僧が作者とみられ、仏教思想に基づいて佳人の衰老落魄のあわれを述べたものである。本作では、痩せ衰え飢餓に喘ぎ、路頭を徘徊する老女「玉造小町」が、往時は容貌美しく贅の限りを尽くしたが、親兄弟を失い孤独に陥り零落し、悲惨をきわめる老境を綿々と語っていく。玉造小町と小野小町は別人だが、平安時代末期から鎌倉時代初頭にかけて両者の混同が進み、鎌倉中期の『十訓抄』や『古今著聞集』では同一人物説を主張するようになる。そして吉田兼好の『徒然草』に至っては、「小野小町がこと、極めて

### 【特集】

小町紅の背景 — “美”のシンボル、  
小野小町像の変遷

### 【ご案内】

中島ゆり恵

「未来の匠 —きらめく彫金—」開催

### ●テーマ展示

「歯にまつわるモノ語り」開催

「まつ毛にお化粧を アイメイクへのまなざし  
—伊勢半まつ毛製品史—」(仮)開催

### ●エデュケーション・レポート5

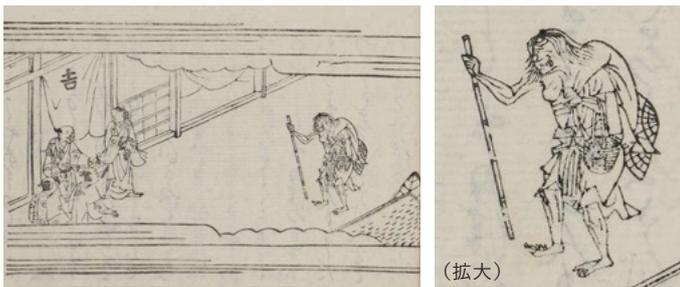
### ●講座 最新情報

●『紅ミュージアム 常設展示図録』  
刊行のお知らせ

●紅ミュージアムオリジナルグッズ 新発売

定かならず。衰へたるさまは玉作という文に見えたり」(第百七十三段)とあり、『玉造小町壮哀書』に語る内容を小野小町的事迹としてすっかり受容している。なお、『十訓抄』では、小町を「若くて色を好みし」女と語る。小町=色好みの図式は、『伊勢物語』に端を発する解釈である。当時は、『伊勢物語』に登場する架空の人物らに実在した人物をあてがって読むことが常であった。本作の登場人物のひとり「色好みなりける女」が小野小町に、その女と恋人であり夫婦である「男」に美男在原業平があてられた。この理解は鎌倉・室町時代を通じて広がり、さながら公式設定のごとく浸透していった。

御伽草子の一編『小町草紙』(室町時代成立)には、中世に流布した小町説話が集約されており、そこには蓬髪ほうまつに破れ衣、裸形に裸足、破れた笠と籠を持ち、杖をついて放浪する痩せ衰えた小町の姿(下図)がある。その様は『玉造小町壮哀書』の老女そのものである。中世の大勢は、とかく晩年の小町の醜さを語ることに重点を置く傾向がある。老醜を強調するための対比として、若い頃の美貌と栄華、色好みの小町が存在している。



『小町草紙』より挿画部分 国文学研究資料館 鶴飼文庫蔵

## 老いた小町の形象化

中世の小町像の形成を語る上で、もうひとつ影響を及ぼしたものがあ。それは謡曲(能)である。南北朝時代以降、小町説話をもとに作られた代表的な謡曲に、「卒塔婆小町」・「通小町」・「関寺小町」・「鸚鵡小町」・「草紙洗小町」(すべて現行曲)があり、これらを総称して小町物という。それぞれの粗筋を述べることは煩雑なため避けるが、注目すべきは小町が往時の姿で登場するのは一曲のみ、草紙洗小町だけという点である。それ以外では老女の小町が主役(シテ)、あるいは亡霊(男を翻弄した果てに地獄へ墮ちたという設定)として登場する。上記小町物は江戸時代にかけて繰り返し上演され、巷間に流布した人気作である。それらに描く小町像が老女を主体としていることは、小町像の形象化に及んで老いのイメージをますます際立たせたことだろう。

## 小町像の変容、美女の代名詞へ

小町物は江戸時代初頭にさらに発展し、作品数を増やす。先の五曲に「清水小町」と「雨乞小町」の二曲が加わった七小町がとくに親しまれた。その一方で、浄瑠璃や歌舞伎に小町物の趣向が取り込まれ、脚色が加えられていく。この過程で小町の

設定は、老女から見栄える美女へと変容を遂げるのである。元禄10年(1697)、京都四条の都万太夫座で上演された近松門左衛門作の歌舞伎「百夜小町」が、おそらくその嚆矢であろう。以降、浄瑠璃では「小野小町都年玉」(1713~4年頃大坂豊竹座上演)、「七小町」(1727年大坂竹本座上演)、「昔男春日野小町」(1757年大坂竹本座上演)、「積恋雪関扉」(1784年江戸桐座上演、のちに歌舞伎化)などがあり、歌舞伎では



「化粧六歌仙」初代歌川豊国画 早稲田大学演劇博物館蔵  
小野小町役を演じたのは当代人気女形の三代目瀬川菊之丞

「好色伝授」(1693年京都早雲長太夫座上演)、「成田山分身不動」(1703年江戸森田座上演)、「芥川紅葉柵」(1753年江戸市村座上演)、「化粧六歌仙」(1789年大坂浅尾弥太郎座上演)などが続く。これら演目も繰り返し上演され、いずれにおいても小町は若く美しく、一途な女性であり、歌才に優れていることを軸とした人物描写になっている。そこに驕慢・老醜の気配は微塵も感じられない。次第に歌舞伎では、小野小町の役柄は若女形(女形の中でも姫や傾城など若く美しい役およびその役者)として定着していくことになる。女形の美貌も相まって当代小町像は華やかな美女へと再定義されたのである。

さらにまた、小町物は錦絵(浮世絵)の画題にもたびたび取り入れられた。趣向としては七小町を美人画に見立てたものであり(古典や説話の題材を当世風の人物や背景に置き換えて描く手法を見立絵という)、その作例は18世紀後半以降に多く認められる。美人画に見立てられた小町像の造形は、もはや歴史上の人物の小野小町ではなく、当世の美女そのままに投影されることとなった。転じて「小町」という語は美女を意味する典型となり、代名詞として一般化していき、ひいては評判の美しい娘をさして「小町娘」や「〇〇小町」と称呼することに繋がっていく。

## 小町紅と“美”の記号

17世紀末以降18世紀を通じ、小町説話・小町物が浄瑠璃や歌舞伎などに脚色され、小町像の形象化における重点が「老女」から「美女」へ移行すると共に、そのイメージが広く共有されていった。奇しくもこの流れは、化粧紅「小町紅」の名称の使用が紅屋同業者間で広がりを見せる時期と連動しているかのごとくであり、看過できない。小町紅とは、小町像に老醜よりも美しさを優先して見出す近世社会の大勢を前提とした商品名だったのである。ここに“小町”は美を想起させる効果的な記号となり、また美称として機能をみたのである。

# 中島ゆり恵「未来の匠 ーきらめく彫金ー」

2021年4月17日(土)ー5月22日(土)開催 観覧無料

※日・月曜日休館(左記を除く祝日は開館)

江戸時代の紅づくりの技を受け継ぐ伊勢半本店が、工芸の世界で伝統の技を継承し日々研鑽を重ねる若手作家を応援したい思いから生まれた作品展「未来の匠」は、5回目を迎えます。

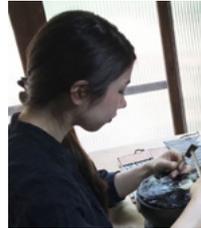
今回、工芸都市として名高い金沢の地で創作活動に取り組む、金工作家 中島ゆり恵氏に、制作いただいた紅板をご紹介します。四季折々の日本の草花をテーマに、凛とした女性の美しさや可憐さを彫金や加賀象嵌を用いて表現した18点です。桜や藤、紫陽花、紅花などのモチーフを、それぞれ正方形タイ



紅板作品

プと長方形タイプのコンパクトケースにデザインしています。

光のきらめきや風の流れ、水面のゆらぎなど自然から着想した優美な作品群も併せて展示、販売します。伝統の技と瑞々しい感性のコラボレーションをぜひご堪能ください。



【作家プロフィール】

中島 ゆり恵/Nakashima Yurie

大分県生まれ

京都伝統工芸大学卒業

金沢卯辰山工芸工房修了

月浦工房を拠点に制作活動を行なっている。

金沢市民芸術村職人大学にて加賀象嵌・彫金専門塾 講師。

〈個展〉2018年「光の庭」(山ノ上ギャラリー/ 金沢)

〈パブリックアート〉2020年 フォーシーズンズホテル東京大手町

## 併催講座「銀象嵌体験 ブローチ/ストラップ作り」

講師：中島ゆり恵氏(金工作家)

日時：2021年4月29日(木・祝)

①10:30～11:30 ②13:30～14:30 ③15:30～16:30

【講座申込み方法】

2021年4月1日(木)10:00申込み受付開始/申込み方法：電話(03-5467-3735)、伊勢半本店webサイトお問い合わせフォーム

会場：紅ミュージアム 2階会議室

定員：各回3名(要予約・先着順)

参加者が小学生以下の場合は、保護者をご同伴ください。

参加費：2,000円(材料費込み)

## テーマ展示「歯にまつわるモノ語り」

2021年4月27日(火)～7月17日(土)

協力：神奈川県歯科医師会 歯の博物館

マスク着用が生活の新様式となり、図らずも自身の口臭に気付いたという人が少なくありません。今日、口腔衛生意識はますます向上し、デンタルケア・オーラルケア関連用品が豊富に展開していますが、そもそも日本において歯ブラシや歯磨き粉の類の商品化が進み、広がりを見るようになるのは江戸時代のことです。しかしながら当時は、歯科医療が未発達なために治療法は限られ、中高齢者になると一気に歯の喪失が進みました。本展では、江戸時代後期から明治時代の「歯」を巡る習慣や信仰と共に、ケアグッズや義歯(入れ歯)などをご紹介します。



「東海道五十三対 石部」  
朝桜楼国芳画  
房楊枝(歯ブラシ)で口腔  
ケアを行う女性



お歯黒を施した入れ歯  
明治時代

## テーマ展示「まつ毛にお化粧を アイメイクへのまなざし ー伊勢半まつ毛製品史ー」(仮)

2021年7月20日(火)～10月23日(土)

江戸時代に花開いた赤・白・黒の伝統化粧は、明治以降に西洋から新しい化粧品、化粧法が流入することにより大きな変化を迎えます。そのひとつ、アイメイク製品は大正末から昭和の初めあたりになると、国内でもみられるようになります。広く普及し、日常的なメイクの一部として浸透するのは昭和40年代のこと、欧米の人のような「立体的な顔立ち」を目指すようになった頃でした。

日常的なマスクの着用が求められる昨今、これまでのようなメイクを楽しむことが難しくなっていますが、一方で目元メイクへの意識は高まっています。今展では、「まつ毛」に関連する製品に注目し、伊勢半グループが昭和32年(1957)から今までに発売したまつ毛化粧料から、各時代のメイクのトレンドを辿っていきます。

左：ヒロインメイクシリーズ(写真は平成21年(2009)・平成22年(2010)発売製品) 右：キスマーアイラッシュカラー(昭和35年(1960)発売)



学ぶ・楽しむ

紅ミュージアムのいろいろ

紅ミュージアムは、2015年度より赤坂青山子ども中高生共育事業に参加しています。本事業には、港区赤坂・青山地区にある、地域の子どもの事業に関わる団体(学校、児童館、企業、NPO等)が登録し、連携事業などを行っています。

2019年には、同じく登録団体のフォーマルウェアメーカー「東京ソワール」の皆さんと連携し、「親子でチャレンジ! 紅染め&コサージュ作り体験」を開催。東京ソワール・紅ミュージアム、それぞれの特性を活かし、ドレスの端切れを紅花の花びらで染め、華やかなコサージュ作りをしました。



レースなどを紅花で染めました。



完成したコサージュを、早速、髪に飾る子も。

また、毎年、六本木の檜町公園にて開催されている「共育フェスティバル」が、2020年度は、感染症対策でオンライン開催になりました。紅ミュージアムも、クイズ「浮世絵に描かれた江戸時代の化粧道具をさがそう!」というオンライン講座を担当し、区内の小中学生を中心に視聴していただきました。

最近では、出前授業などをきっかけに、近隣の子どもの来館が増えています。今後も、子どもたちにとって楽しい学びの場となるよう、さまざまなプログラムを企画していきたいと思っています。



オンライン講座アーカイブより

講座 最新情報

《オンライン講座開催》

昨年5月より延期されていた、「白い歯と黒い歯の粧い」～歯科医が語るお歯黒と歯みがきの歴史について～(講師:神奈川県歯科医師会 歯の博物館館長 大野肅英氏)は、2021年1月30日、紅ミュージアム初のZoomを使用したオンライン講座として開催し、約40名の方にご参加いただきました。



《「組紐体験講座」ただいま準備中》

昨年7月より延期中の「組紐体験講座」～紅染めの絹糸を組み上げる～(講師:株式会社龍工房 福田隆太氏)は、2021年度中の開催を目指しています。過日、講座で使用する絹糸の紅染めが行われました。赤色・黄色に美しく染まった絹糸を、講座で使う日が楽しみです!



※新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、昨年よりいくつかの講座が延期となっておりますが、開催日などの最新情報は、伊勢半本店webサイトやSNSで随時お知らせいたします。メールでのご案内をご希望の方は、同webサイトのお問い合わせフォームよりお申し込みください。種別「講座・イベントについて」をご選択、必須項目をご入力の上、内容欄に「講座情報希望」とお書きください。

『紅ミュージアム 常設展示図録』刊行のお知らせ

常設展示の内容を解説した『紅ミュージアム 常設展示図録』が刊行されます。4月30日(金)よりミュージアムショップにて販売します(通信販売でもご購入いただけます)。A4版、全106ページ、フルカラー、3,300円(税込)です。紅と化粧の歴史をわかりやすくまとめた一冊です。



紅ミュージアムオリジナルグッズ 新発売

江戸時代の化粧道具や、キスマー、エリザベスの懐かしい化粧品など、紅ミュージアムの収蔵品をモチーフにしたグッズを発売しました。ご来館の記念に、またご友人へのお土産にいかがでしょうか?



(中央・右下)A5ポケットクリアファイル[2柄] 各385円、(左下)メモパッドスクエア 385円、(右上)ブック型ふせん 440円 ※価格はすべて税込



紅ミュージアム  
BENI MUSEUM

Presented by  
KISSME

開館時間 / 10:00-18:00(最終入館は17:30まで) ※短縮開館等の変動あり

休館日 / 毎週日・月曜日・創業記念日(7月7日)・年末年始

入館料 / 無料 ※ただし、企画展観覧は有料

アクセス / 地下鉄 東京メトロ銀座線・半蔵門線・千代田線「表参道」駅下車 B1出口(階段)より徒歩12分 / B3出口(エスカレーター・エレベーターあり)より徒歩13分

バス 渋谷駅東口バスターミナル 51番乗り場 都01新橋駅前「南青山七丁目」停留所下車

〒107-0062 東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F TEL.03-5467-3735

最新の情報は当館webサイトでご確認ください。 <https://www.isehanhonten.co.jp>

